

---

# 約束の青い首輪

虹色恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束の青い首輪

### 【Nコード】

N6085E

### 【作者名】

虹色恵

### 【あらすじ】

健一に拾われた捨て犬ウオンは、「死ぬまで一緒」と書いた青い首輪をされ、とても仲良しだった。首輪の約束は、果たして守られるのか……

ウオンと健一は、大の仲良しでした。健一が学校から帰ってくる  
と、ウオンは待ってましたとばかりに飛びついて、顔中をぺるぺる  
なめまわすのでした。健一は、そんなウオンと一緒に走ったり遊ん  
だりするのが大好きでした。

ウオンは、二年前に川のほとりに捨てられて鳴いているのを、健  
一に拾われたのでした。健一は寒くて震えているウオンを、風呂場  
でいいねいに洗い、乾かしてあげました。

「かわいそうにな。これから俺のうちに住むんだぞ」

ウオンはうれしそうに健一の目を見て、ワンツと一声鳴きました。

健一は、青い首輪を買ってくると、首輪の裏に彫刻刀で何やら彫り  
付けました。そこには、こう書いてありました。

「ウオンと死ぬまで友だち 健一」

健一は、学校で友だちとけんかして、寂しい思いをしていました。  
そんなとき、ウオンと出会って、健一の心はなぐさめられました。  
ウオンが健一の友だちになったからです。ウオンと健一はいつもい  
つも一緒でした。健一は、いつも口癖のようにウオンにいいました。  
「ウオン、約束だよ」

健一とウオンの生活がどんどん過ぎていき、健一は高校生になり  
ました。健一には、かわいらしい女の子の友だちができ、野球部も  
忙しくなってきました。健一の帰りも遅くなり、ウオンはそんな健  
一の帰りをずっとおとなしく待っているのです。真っ暗になって、  
健一が帰ってくると、ウオンはちぎれるようにしっぽを振って迎え  
るのでした。そして健一はウオンを散歩に連れていくのですが、  
部活で疲れているので、一緒に走ったりすることはなくなりました。  
そして前のように芝生に座って、夕焼けを見ながらお話をすること  
もなくなくなっていきました。それでもウオンは、健一と一緒にいられ

るだけで幸せでした。夜になると、健一の寝るベッドのそばで、ウオンも静かに寝息をたてるのでした。

時は過ぎ、健一は大人になりました。健一が高校までは、ウオンは家の中で、いつも健一のそばで暮らしていました。でも健一が高校を卒業すると、ウオンは外に出されることになりました。健一に小屋をつくってもらい、ウオンはその小屋の中で寝るようになりました。

「ごめんな、ウオン。俺の彼女、犬がきらいなんだ」

ウオンは、最初クンクン鳴きましたが、健一に散歩に連れていってもらった時、ときどきなでられるだけで幸せなでした。ウオンの顔は、だいぶ白髪で白くなってきていました。また、昔のように走れなくなってきました。ウオンは、いつも健一が寄ってきてなでしてくれるのだけが楽しみで、寝そべっているのです。

何年か過ぎ、健一は結婚することになりました。うちを離れ、どこか遠くへ行って住むことになったのです。今では、散歩もときどきしか連れていってもらえず、えさも忘れられるときさえありました。それでもウオンは、いつも健一を待っていました。健一が近づくと、しっぽがちぎれるくらい振って、顔をなめようと飛びつきました。

ある日、健一は、ウオンの小屋に来て、ウオンに話しかけました。「ウオン、ごめんな。俺は遠くへ行くことになったんだ。お父さんもお母さんも、俺が面倒をみなくなるのなら、おまえを……。ほんとにごめんな」

健一は、ウオンの頭をなでると、ウオンは健一の顔をひとめして、じっと健一の目を見ました。

それから二、三日過ぎたころ、ウオンは健一の車に乗せられ、保健所に連れていかれました。

「じゃあな」

わざと振り返らずに、一言いって去ってゆく健一の後姿を、ウオンはいつまでも見つめていました。ウオンは奥に連れていかれ、檻の中に入れられました。そこには、たくさんの犬や猫が幾つもの檻に閉じ込められていました。同じ檻にいたビーグルが、新入りのウオンに話しかけてきました。

「おまえ、捨てられたんだろう」

「違うよ。ちょっとここに預けられただけさ」

ウオンがそういうと、ビーグルもほかの犬も、おもしろそうに笑いころげました。

「今の聞いたかい？預けられたただけだってさ。おい、新入り、俺たちの命が、あとどれだけか知ってるのか？」

「何の話だ。俺には関係ない」

「大ありさ。俺たちはな、一日たつごとに隣の檻に移されて、七つ目の檻はもうないのさ。どういふことが分かるか。七日目には、別の箱に入れられて、殺されるのさ」

ウオンは、耳に入らないとでもいうように、寝てしまいました。ウオンは心の中でこう思っていたんです。（健一は、僕をきつと迎えにきてくれる。だって、僕たち、約束したんだもの。いつまでも友だちだって。）

少したったころ、健一はウオンの小屋を壊しました。散歩に連れていかなくても済むので、楽になったような、何か物足りないような気がしていました。健一の心の中で、いつのまにか、ウオンが友だちから、ただの犬になっていったのです。いろんな生活の変化が訪れ、健一の心をいろんなことが入り込み、ウオンの占める場所が小さくなっていったのです。心に痛みはありましたが、「しかたがないさ」の一言であきらめていました。「もう飼えないんだから」それ以上、ウオンのことを考えるのをやめました。健一は、ほかのいろいろなこと、忙しすぎたのです。ふと、健一の目に青い

首輪が目に入りました。ゴミ箱に捨てようと、健一が手に取ったとき、健一は、はっとしました。それは、健一が小さいときに、ウォンと交わした約束の首輪でした。裏には、すり切れて半分見えなくなっていたけれど、あの約束の文字が読み取れました。

「ウォンと死ぬまで友だち 健一」

健一は、はっとしました。

「ウォン！」

健一は、小さいころ、ウォンと一緒に見た夕日を思い出しました。

（あのころ、ウォンはいつも俺のそばにいてくれた。友だちとけんかしても、ウォンが涙をなめてくれた。散歩のとき、同級生にいじめられそうになったとき、ウォンは俺の前に飛び出して守ってくれたんだ。それなのに、俺は何てことをしてしまったんだ。約束を破ってしまった）

健一は家を飛び出しました。

「ウォン、ごめん、ごめん、待っていてくれ。すぐ迎えに行くから。俺たちは、死ぬまで友だちなんだから。」

健一が保健所に着くと、ウォンは一番奥の檻にいました。ウォンがこの施設に入れられてから六日がたっていたのです。その間、何匹かの犬たちが殺されていきました。ビーグルが、「とうとう俺たちも、きょうまでだな」といっても、ウォンは知らん顔して寝ていました。健一が迎えに来てくれるのをじっと待っていたんです。

「ウォン！悪かった！俺を許してくれ！」

ウォンは、さっと立ち上がって耳を立てました。ビーグルは、おやつという顔をして、「ほんとに迎えにきた。なんてやつだ」とつぶやきました。ウォンは檻から出されると、一目散に健一の胸の中に飛び込んで、健一の顔をなめまわしました。遅かったね、とでもいうように。健一は泣きながら、ウォンの首に、あの青い約束の首輪をはめました。

「もうこの首輪ははずさないよ。もう一度、俺を信じてくれ、ウォン。俺はどうかしていたんだ」

ウォンは、うれしそうにじゃれながら、健一のうしろについて帰りました。いつもの散歩の帰りのように。それからウォンは、健一と一緒に引越しをし、健一と奥さんのベッドの隣りで眠りました。その年老いた顔は、とても幸せそうでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6085e/>

---

約束の青い首輪

2010年11月17日15時25分発行